

News Letter

Graduate School of Education

②巻頭言

稲垣 恭子 副研究科長

③研究ノート

教員から	竹内 里欧	教育社会学講座 准教授
院生から	皆本 麻実	心理臨床学講座 博士後期課程2年
社会人院生から	望月 実	教育科学専攻(専修コース) 修士課程1年
留学生から	戴 イ琳	教育社会学講座 修士課程1年

⑤活動報告

臨床教育実践研究センターから
中藤 信哉 附属臨床教育実践研究センター 特定助教

教育実践コラボレーション・センターから
南部 広孝 比較教育政策学講座 准教授

⑥E.FORUMの取り組み

西岡加名恵 教育方法学講座 准教授

⑥教育学部の特色入試について

楠見 孝 教育学部 特色入試委員会委員長 教育認知心理学講座 教授

⑦大学院・学部第3年次編入学 入試説明会

⑦オープンキャンパス2014

⑧平成26年度教育学研究科長賞・教育学部長賞

稲垣 恭子	学生表彰選考委員会委員長
後藤 崇志	教育認知心理学講座 博士後期課程3年
野崎 優樹	教育認知心理学講座 博士後期課程2年

⑨事務室から

田中 孝二 事務長

⑨図書室から

飯田 智子 図書掛長

⑩諸記録

①おもな出来事 ②人事異動 ③外部資金受入

⑫諸報

新任教員・事務職員紹介

「背伸び文化」再考

副研究科長 稲垣 恭子



最近、「まなび(学び)」ということばがあちこちで目につくようになってきた。主体的なまなび、共同的なまなび、創造的なまなびなど、文脈によってその意味はさまざまだが、いわば「よい教育」を示すマジックワードのようにになっている。あまり頻繁にでてくると、どこか鬱陶しく思ってしまうところもある。

「まなび」という和語が使われる際になんとなく共通しているのは、上から教えこむという上から目線の教育ではなく、学習する側の積極性を引き出すような親切で柔らかな支援や配慮が感じられることである。もちろん、学生・生徒の状況に合わせて適切な配慮やアドバイスをしていくことが教育の重要な側面であることはいうまでもない。しかし、そうした居心地のいい環境だけが必ずしも独創性や創造的な知を生み出すわけでもないだろう。

学問知やそれを支えるシステムがリジッドな状況の下では、それらとの格闘のなかで独創性や創造的な知が生み出されることも少なくない。しかし現在のように、学問の構造もそれを支えるシステムも流動的しつづつあるなかでは、知の組み換えや組み合わせの柔軟性が広がる一方で、それらが新しい知の創造につながるかどうか曖昧になりがちである。最近、ある雑誌のコラムのなかで、教育社会学者の潮木守一氏が、書店で人文・社会系のコーナーが見当たらずどこにあるのか探していたら、「雑学」というコーナーに並んでいたというエピソードを紹介していた。知のフラット化がもたらす方向が、この「雑学」ということばから窺えるような気がした。

本学では、平成28年度から全学部で特色入試を実施することが決定され、各学部で新しい入試方式によって求める人物像や、具体的な選抜方法、基準がほぼ固まってきた。教育学部では、求める人物像として、次のような項目を掲げ

ている。

・教科の学習及び総合的な学習の時間などにおいて学習を深め、テーマを設定して探究活動を行い、卓越した学力を身につけ、成果をあげた者、あるいは、学校内外の活動で豊かな経験を積み、創造的な熟達を通して、深い洞察を得ている者

・人間と社会、教育や心理について関心を持ち、論理的・批判的に思考し、問題を解決する能力とコミュニケーション能力を持つ者

・将来、教育や心理にかかわる専門的識見を発揮して、社会に貢献する志を持つ者

特色入試方式によって、こうした能力・才能をもった学生を選抜できることがまず目標である。それと同時に、新入学生が知的好奇心や専門学問への興味を失速することなく、そのエネルギーを持続できるような知的環境を準備することも重要な課題である。教育学研究科では、教育実践コラボレーションセンターの活動やEフォーラム等を通して、いくつかの高等学校と高大連携による研究会やシンポジウム、プロジェクトを継続的に行なってきた。それらの実践と知見をベースにして、新しい入試方式に見合ったカリキュラムや制度を整備していくことが可能であろう。その際、高校の授業とのなだらかな連続性だけでなく、少し難しくても専門学問の世界にチャレンジする機会を提供することも必要ではないだろうか。たとえば、一回生の内から、専門領域の概論科目や講義などを受講できるようにするなど一案である。

学問知やそれを支える制度の液状化が進むなかで、「背伸びする」知的文化を育てていくことも重要な課題ではないかと思うのである。

研究ノート

教員から

教育社会学講座
准教授

竹内 里欧



院生から

心理臨床学講座
博士後期課程2年

皆本 麻実



「遊び」の効用

2014年10月1日に着任いたしました竹内里欧と申します。よろしく願いいたします。

数年前まで文学研究科(及び人間・環境学研究科)でポスドク生活を送っていたので、京大に戻ると学生の立場に戻ったような懐かしい気持ちになっております。自身の研究生生活を振り返ると、一つのテーマに沿って計画を立てて着実に、というのとは程遠く、テーマの周りをあっちへ行ったりこっちへ行ったり、研究に直接関係ない本を少しでも読むつもりがついて読みふけてしまって、ああ今日も1日がよくわからないままに終わってしまった……、ということも多く、今思えば恥ずかしい学生でした。しかし、それなりに気合を入れて(?)現実逃避をすると、何故か社会学の理論がわかりやすくなっていたり、研究の方向性が定まったりして、社会学は懐の深い学問だなあと感心したものです。

たとえば、私は、ナショナリズムと文明化の関係を研究テーマとしており、博士論文では、近代日本社会において、西洋化や文明化を象徴する理想的人間像として機能

した「紳士」という表象をめぐる言説について分析を行ったのですが、その際、以前より気になっていた小説(「手巾」)が研究へと押し出す力になりました。「手巾」は芥川龍之介が1916年に発表した有名な短編ですが、その中で、芥川は、新渡戸稲造を彷彿とさせる「日本のジェントルマンシップ」を模索する主人公を戯画化し冷酷に描きます。芥川は何故このような小説を書いたのだろう、主人公が陥る不安というのは何か、それは近代日本社会にどのような暗示をもたしているのか、という疑問が、博士論文のテーマにつながっていったように思います。

私が学生の頃は、よくいえば自由、悪くいえばややぼったかしの環境であつたがゆえに、現実逃避の生活を送ることができた(送ってしまった)のですが、だからこそ、カイヨフのいうところの「遊」の体験を思う存分享受できたのかもしれない。学生のみなさんには、「聖」「俗」のみならず、自由な発想や文化の源である「遊」の世界の豊かさもぜひ大切にしてほしいと思っています。

実践と研究の間で

臨床心理士として仕事をしていきたいと思い、本学に入学しました。とにかく実践経験を積みたいという気持ちがあったので、研究と聞くと何となく堅苦しい印象があり、正直、学部生の頃は研究にはあまり積極的になれませんでした。しかし、大学院に入り実践を開始してから、ようやく研究に意義を感じられるようになりました。

私は心理臨床における遊びというテーマを基に研究をしています。このテーマは、自分が担当したプレイセラピーの中から生じてきた、“なぜうまく遊べない子がいるのだろうか?”という疑問が出发点となっています。プレイセラピーにおける遊びというテーマ自体は、心理臨床学の研究で多く扱われているものですが、私は行為としての遊びという側面だけでなく、遊びの概念や構造、あるいは歴史的側面などにも関心があります。セラピスト自身の遊び心の在り方や精神病理と遊びの関連性、大人の心理療法における遊びの様相など、実践との関連で興味は広がる一方です。なかなか大きなテーマですが、心理療法の治療的な意義を少しでも明らかにしたい、

自身の臨床のためになる研究をしたい、という気持ちがある原動力となって、自分なりにやりがいを感じながら研究に取り組んでいます。

そして、肝心の実践では、その難しさを痛感する毎日です。知識や研究を意識して頭でっかちになってしまふと、クライアントの方のこころの動きに沿えなくなるように感じる場合があります。一方で、その場に身を置いた時のセラピストとしての自身の振る舞いや、考えること、感じることなどが、クライアントの方を理解する大事な素材になるとも感じます。目の前の方を理解することと同時に、自分自身についても理解を深めていくことが、今の私にとっての大きな課題のひとつです。

私の実践と研究が有機的に絡み合うにはまだ時間がかかりそうですが、両者の間を行ったり来たりしながら考え続けていくことが、私が専門家として成長していくために必要なことだと思っています。よりよい実践を目指して、今後も努力を続けていきたいと思っています。

社会人院生
から

教育科学専攻(専修コース)
修士課程1年

望月 実



教育を編み直すまなざしを求めて

私が、教育学研究科で学ばせていただこうと考えたのは、2006年度よりこちらで行われているE.FORUMに参加したことがきっかけです。研究者、実践者、院生や学生が一体となつての学びを目の当たりにし、「ここには、教育研究と学びの理想のモデルがある。」と、実感しました。以来、参加を重ね、さらに深く教育課題を探究したいと願い、大学院に参りました。

入学前は、小学校で、「教育に大切なことは、みんな子どもが教えてくれる。」と考え、研鑽と実践の日々を送ってきました。

その中で、「学びがい」の大切さに気づき、「学びがいのある活動」を授業づくりの核に据えることを考えました。例えば、宮沢賢治の「やまなし」の授業では、子どもの学びがいを考えて、「デイサービスでの朗読会」を設定しました。読み取った物語の内容をきちんと伝える朗読会を学習のゴールにするのです。子どもたちは楽しそうに学習に取り組みました。

そこで、それを学力という視点で説明しようと考えまし

た。ところが、「学びがいのある活動」の価値を経験や勘では語れても、学力の理論に当てはめた、明確な答えを出せませんでした。

そこに光を差し込んでくれたのが、西岡先生から学んだ「逆向き設計」論でした。この理論を踏まえたとき、「学びがいのある活動」という課題、授業の目標、評価、授業内容が単元カリキュラムとしてしっかりと、編み直されることを実感できたのです。

大学院では、現場の実践の中でずっと抱えていた違和感を晴らしたいと考えています。教師が、子ども主体の学びを考えて働き掛ければ、それはもはや子どもの主体性とは言えないという矛盾や、子どもをネブミする教育の暴力性に対する違和感です。これらの違和感をどのように乗り越えるのか、その方途を生活綴方教師の実践や、そこに存在した議論の中に見いだせないかと考えています。

教育現場にいただけでは、もつことのできなかったであろう、教育方法の学というまなざしに出会えたことを感謝しています。

京から学術の世界へ

去年の今頃、宇治の国際交流会館の部屋に引きこもって、入試論文に追われていた私がいまもう修士一年の後期を迎えました。やはり好きな場所で好きなことをやっている時は、時間は何倍も速く過ぎていくでしょうね。

私は中国の大学での専攻は日本語で、24音図から日本文学まで幅広い日本語の知識を勉強しました。同級生の中で、中国の大学院で日本語の文法や日本文学、翻訳などを研究して日本語の勉強に精進している人は少なくないですが、私にとって、外国語はあくまでもコミュニケーションのツールであり、それを利用してもっと幅広い知識を勉強しないともったいないと考えて、留学を決意しました。

卒業論文はエリクソンの発達段階理論を使って、青春小説の主人公のモラトリアム状態を分析しましたが、教育社会学の研究室に入ってから心理学の視点から社会学の視点に転じて、マクロのレベルで社会問題に注目するようになりました。入試論文は「職業観から

見る中国人留学生のアイデンティティ変容—改革開放から今までの30年—」をテーマとして、中国高等教育の拡張により、中国人留学生の留学選択と就職選択がどのように変化してきたのかについて論じました。入試論文は未熟なもので、面接の時先生方々からいろいろ質問されましたが、三ヶ月をかけて必死に資料を探し、データを集めて分析をして、初めての「研究成果」をあげました時、達成感が溢れて研究の楽しさを身をもって感じました。今後は、留学生の問題に焦点を絞りつつ、国際移動は中国人留学生の教育達成、地位達成にどんな影響を及ぼすのかをはっきりさせたいです。

留学生として京大で学ぶにあたって、言語にも考え方の違いにも困難を感じていますが、京大の先生と院生はみんな知識を尊重し、真剣に研究をやっていますので、私も困難を乗り越えて自分の研究を完成しなければならぬと決めています。周囲の人たちからのご指導と励ましから、これからの道を進んでいきたいと考えています。

留学生から

教育社会学講座
修士課程1年

戴 イ琳



臨床教育実践研究センターから

センターの活動と実践の報告

附属臨床教育実践研究センター 特定助教 中藤 信哉



開設18年目となります臨床教育実践研究センターでは、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動しています。また、毎年専門家や一般市民に向けた講座を開催しています。

本年も8月に「いじめへの理解と対応」をテーマとして第18回リカレント教育講座の開催を予定し、約100名のお申し込みをいただいておりますが、当日台風の接近に伴う荒天のため、やむなく開催を中止させていただきました。お申し込みいただいた方々にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。今年度の講座のテーマについては、社会や教育現場におけるニーズを考慮いたしまして、また次年度以降に取り上げていくことを考えています。

9月10日に、英国精神分析協会フェローで、精神分析家であるInge Wise先生が、当センターの外国人客員教授として着任されました。10月19日には、Wise先生を講師として、「創造性と心の発達」と題した公開講座を開催いたしました。当日は、一般の市民の方や、心理臨床家、医師など、50名の方にご参加いただき、貴重な学びの機会となりました。

また、東日本大震災後に当センターに設置されたこころの支援室では、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援を継続しております。今年度は5月と9月に支援プログラムを実施し、1月にも実施を計画しております。避難・移住されてきた方々の困難は時間の経過とともに個別化していく状況にあり、そのことを考慮しながら今後も同様の取り組みを継続していくつもりをしています。

こうした当センターの活動を支えていただいている方々に感謝するとともに、今後ともご協力とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



教育実践コラボレーション・センターから

北京師範大学教育学部との交流

比較教育政策学講座 准教授 南部 広孝



本センターはさまざまな形でコラボレーション(協働)に取り組んでいますが、その1つに国際交流の取り組みがあります。今回は、その中でも北京師範大学教育学部との間で進めている交流活動について紹介したいと思います。同学部とは、その前身である教育学院との間で2006年に部局間学術交流協定を締結して以来、継続的に交流を行ってきました。

北京師範大学教育学部との交流活動には現在、大きく2つの柱があります。1つは教員の相互派遣です。基本的に毎年交互に教員を派遣して相手大学で講義を行っています。今年度(2014年度)は、本研究科から北京師範大学に行く番でしたので、9月下旬に山名淳准教授に同大学で集中講義をしていただきました。

もう1つの柱は大学院生の交流活動です。現在の形式は2010年から続いていて、

統一テーマのもとで大学院生による英語での研究発表と校外活動を組み合わせたプログラムとなっています。この交流活動は大学院生が主体的に企画・準備、運営を行うことにしていて、事前に公募で選ばれた本研究科参加者が、参加者同士で話し合いながら、また北京師範大学の大学院生とも相談しながら開催にこぎつけています。毎回、比較的大きなテーマを設定し、そのもとで多様な分野の大学院生が講座を越えて参加しています。こちらも京都と北京での隔年開催で、5回目となる今年度は京都で、「Toward Restructuring the Educational Environment」(教育環境の再構築に向けて)を統一テーマとして12月初めに行われました。

この活動は、大学院生に英語での研究発表の機会を提供するとともに、海外の大学院生との交流を通じて研究上の刺激を与える点で大きな意義があると思います。また、研究科内の異なる学問領域、異なる学年の大学院生が交流することで、各自の研究を相対化させる視点を得たり違った見方があることを実感したりすることにつながると考えています。活動の成果は毎年報告書としてまとめているので、ぜひご一読ください。

E.FORUMの取り組み

教育方法学講座 准教授 西岡 加名恵



E.FORUMは、教師のライフコース全体を見通した力量向上のネットワークを築くことをめざしています。現在は、次の3つの柱で活動を行っています。詳細は、<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/e-forum/>をご覧ください。

①全国スクールリーダー育成研修の実施

2014年度は、「教師に求められるワザとは何か」(鈴木晶子教授)、「個性を生かす教育を考える」(松下姫歌准教授)、ワークショップ「学校教育における場づくりを考える」(山名淳准教授・服部憲児准教授)・「若い教師に伝えたい授業づくりのフレーム」(石井英真准教授)など、内容を刷新して提供しました。参加者からは、「教育の原点のようなものを改めて実感できました」、「自分自身のパワーを充電することができた」といった声が寄せられました。

②教育研究セミナーの開催

教師教育や入試改革など時事的な課題を取り上げ、シンポジウムなどを開催しています。2014年度は、高大の教育接続を改善するために、どのようなカリキュラム改革が求められているのかを探るため、「大学教育改革を考える——教養とは何か」(10月17日)、「高大におけるカリキュラム改革を考える——探究力育成の視点から」(12月23日)を開催しています。

③会員間の実践交流や共同研究開発プロジェクトの推進

E.FORUMでは、会員の実践資料を蓄積するデータベース「E.FORUM Online(EFO)」を開発しています。そのデータなどを生かし、2014年春には、各教科の「本質的な問い」やパフォーマンス課題などを提案した「E.FORUMスタンダード(第1次案)」を公表しました。2015年3月28日には、参加者で実践資料を持ち寄り交流していただく「実践交流会」を開催予定です。

おかげさまでE.FORUMは、2015年度に10周年を迎えます。10周年にふさわしい企画を考えていきたいと思っておりますので、引き続きのご支援をお願いいたします。



教育学部の特色入試について

教育学部 特色入試委員会委員長 教育認知心理学講座 教授 楠見 孝



京都大学全体で1年後の平成27年秋から特色入試が実施されます。その全学と部局の実施準備委員会は平成25年4月にスタートし、この10月からは実施のための委員会となりました。

教育学部の特色入試の入学定員は、全体の1割の6名です。特色入試を通して教育学部が求める人間像は、次の通りです。(1)教科の学習および総合的な学習の時間などにおいて学習を深め、テーマを設定して探究活動を行い、卓越した学力を身につけ、成果をあげた者、あるいは、学校内外の活動で豊かな経験を積み、創造的な熟達を通して、深い洞察を得ている者、(2)人間と社会、教育や心理について関心を持ち、論理的・批判的に思考し、問題を解決する能力とコミュニケーション能力をもつ者、(3)将来、教育や心理にかかわる専門的識見を発揮して、社会に貢献する志をもつ者。

教育学部の特色入試は、パフォーマンス評価(知識やスキルを活用・応用・総合する力をみるために、学習の成果物やそれに関わる活動を評価する方法)を重視しています。具体的には、第1次選考では、志願者が提出した「学びの報告書」(現在までに取り組んだ「学び」の活動の成果や意義を記述したもので、成果や資料を添付)と「学びの設計書」(教育学部に入学したら、

どんなことを探究したいかを記述)、調査書(出願要件は、調査書の全体の評定平均値4.3以上)に基づいて評価します。第2次選考では、課題(読解力、論理的・批判的思考力、問題解決能力などについて評価)と口頭試問(探究心と洞察力、コミュニケーション能力などについて評価)に基づいて選考をおこないます。そして、第2次選考に合格した者において、大学入試センター試験の得点の合計が900点満点中80%以上の者を合格者とします。

来年秋の特色入試の日程は、出願受付(H27.10.5~9)、第1次選考結果発表(11.6)、第2次選考(11.28~29)、第2次選考結果発表(12.15)、合格発表(H28.2.10)、入学手続(2.12~17)です。

特色入試の成功は、その趣旨を広くご理解いただき、多くの優秀な受験生が志願することにかかっていますので、オープンキャンパス、各地の入試フェア、高校訪問の際のパンフレット配布など、さまざまな機会を通じて広報や案内を行っていきたく存じます。

なお、サンプル問題を含む詳細な情報は、大学の入試関連情報のウェブページと部局ウェブページに掲載予定です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

大学院・学部第3年次編入学 入試説明会

平成26年6月21日(土)京都大学吉田キャンパスにおいて、平成26年7月5日(土)京都大学東京オフィスにおいて、大学院及び学部第3年次入試説明会が開催された。

吉田キャンパスでは、14時から西平直教務委員長からの歓迎のあいさつ後、入試ガイダンス、大学院学生による個別相談が行われた。

東京オフィスでは、14時から西平直教務委員長からの歓迎のあいさつ後、岩井八郎教授によるオープニングレクチャー「『曖昧さ』の魅力を考える—教育組織の社会学—」、入試ガイダンス、個別相談が行われた。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。



オープンキャンパス2014

平成26年8月7日(木)、8日(金)の両日、「京都大学オープンキャンパス2014」が開催された。

本学部においては、8月8日(金)12時30分から実施し、391名の参加者があった。

当日は、子安増生学部長からの歓迎のあいさつ後、田中康裕准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別に相談にあたり、高校生の相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、満足気な様子が見られた。



H26年5月～H26年10月のおもな出来事

5月	18日(日)	京都大学農学研究科附属農場、附属臨床教育実践研究センター内こころの支援室共催 京大農場・果樹園ツアー (農学研究科附属農場)
	29日(木)	教育実践コラボレーション・センター主催 第6回 知的コラボの会『「生命性が息づく「管理」とは～旭山動物園の挑戦～」』 (教育学部本館第1会議室)
6月	21日(土)	大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会 (文学部校舎)
	26日(木)	教育実践コラボレーション・センター主催 第7回 知的コラボの会『学生参加による大学教育改善の可能性と課題』 (教育学部本館第1会議室)
	28日(土)	教育実践コラボレーション・センター主催 野童いなか塾 夏の自然観察会 (京都府相楽郡南山城村旧野殿童仙房小学校・三郷田観察ルート)
7月	5日(土)	大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会 (京都大学東京オフィス)
	7日(月)	教育学研究科主催 京都大学教職課程特別企画 講演会「いま求められる授業や教師のあり方とは？」 (吉田南4号館)
	17日(木)	教育実践コラボレーション・センター主催 第8回 知的コラボの会『現代日本の学力向上政策―「スタンダードに基づく教育改革」を問い直す視座―』 (教育学部本館第1会議室)
8月	8日(金)	教育学部オープンキャンパス
	19日(火)～20日(水)	教育実践コラボレーション・センター主催 2014年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修 (人間・環境学研究科棟他)
9月	7日(日)	附属臨床教育実践研究センター内こころの支援室主催 京大探検ゲーム & 和・話・輪の会 (総合研究1号館)
	22日(月)～26日(金)	北京師範大学教育学部にて山名淳准教授による集中講義
	25日(木)	教育実践コラボレーション・センター主催 第9回 知的コラボの会『カリキュラムをどうつくるか』 (教育学部本館第1会議室)
10月	17日(金)	教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM教育研究セミナーI「大学教育改革を考える―教養とは何か―」 (教育学部本館第1会議室)
	19日(日)	附属臨床教育実践研究センター主催 公開講座「創造性と心の発達」客員教授Inge Wise氏 (京都大学百周年時計台記念館)

人事異動(H26年7月～H26年11月)

平成26年7月28日付け			採用
平成26年8月1日付け			採用
平成26年9月1日付け			採用
平成26年9月10日付け			採用
WISE, Inge	客員教授 (附属臨床教育実践研究センター)		採用
平成26年10月1日付け			採用
MANALO, Emmanuel	特定教授(教育認知心理学講座)		採用
竹内 里欧	准教授(教育社会学講座)		採用
			国立民族学博物館情報管理施設情報サービス課情報サービス係長へ転出
			国立民族学博物館情報管理施設情報サービス課文献図書係長から転入
			研究国際部国際企画課(事務補佐員)から採用
			地球環境学堂教務掛(任期付職員)から採用
平成26年11月1日付け			採用
平成26年11月30日付け			辞職
浦田 悠	研究員		辞職

外部資金受入

◎寄附金

名称・寄附目的		寄附者	研究担当者
(名称)	乳幼児期の感覚運動的相互作用が子どもと親の脳、身体特性に与える影響について	一般財団法人 前川財団 理事長 金澤 岳夫	明和 政子
(目的)	同上		
(名称)	ヘルシンキ大学・ヘルシンキコレギウムでの在外研究への助成金	Sami Pihlström, Helsinki Collegium for Advanced Studies University of Helsinki	齋藤 直子
(目的)	同上		
(名称)	公益財団法人 三菱財団助成	公益財団法人 三菱財団 理事長 畔柳 信雄	大山 泰宏
(目的)	能と心理療法の関連からみた日本文化における「癒し」の深層に関する研究		

新任教員・事務職員紹介



MANALO, Emmanuel

特定教授

(2015年4月より教育学研究科教授)

I feel honored to have the opportunity to be able to contribute to the high standards of teaching and research that Kyoto University is recognised for.

よろしくお願いします。

所 属 教育認知心理学講座
専 門 教育心理学 Educational Psychology

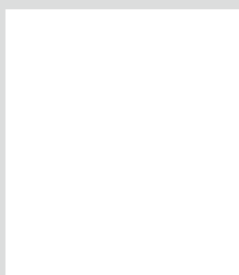


竹内 里欧

准教授

長い学生時代を過ごしたキャンパスに戻ってきて懐かしいです。恵まれた環境に感謝しつつ、研究・教育に精進していきたいです。

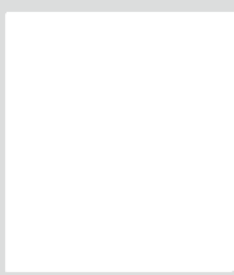
所 属 教育社会学講座
専 門 文化社会学・歴史社会学



掛長

皆さまが気軽に利用したいと思える図書室づくりを目指します。どうぞよろしくお願いいたします。

所属掛 図書掛



特定業務職員

10月から総務掛でお世話になって居ります。早く皆様のお役に立てるよう色々と勉強中ですが、ご指導宜しく願い申し上げます。

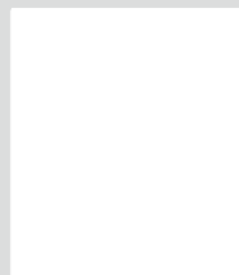
所属掛 総務掛



特定業務職員

10月より教務掛でお世話になっております。早くお役に立てるよう頑張ってお参りますので、ご指導方よろしくお願いいたします。

所属掛 教務掛



派遣職員

7月から図書掛でお世話になっています。図書室が少しでも有効利用していただけるように頑張りますので、よろしくお願いいたします。

所属掛 図書掛

編集後記



『ニューズレター』第29号をお届けします。今回、表紙を全面的にリニューアルしました。広報委員会がA案、B案、C案の投票を行い、最終的にこのスタイルに落ち着きました。本冊子のPDFは創刊号(2000年11月)から教育学部研究科HPで通覧できます。表紙の変遷を確認していただき、ご感想をお寄せいただければ幸いです。ちなみに、メディア論ではストックされる紙媒体とフローな電子媒体を対比するのが一般でした。しかし、ウェブ上にアップされたデジタル情報はストックされ続けます。それは便利で望ましいことなのですが、今年5月に欧州連合(EU)司法裁判所が下した、人には「忘れられる権利」があるとの判断がちらりと脳裏をよぎりました。(S)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長 明和 政子 教授
(教育方法学講座)
委 員 子安 増生 教授
(教育学研究科長・教育学部長)
委 員 田中 康裕 准教授
(心理臨床学講座)
委 員 佐藤 卓己 准教授
(生涯教育学講座)
委 員 田中 孝二 事務長
委 員 古屋 比奈 総務掛長
委 員 中尾 知里 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>